

南方（仏印）

我が人生の

骨格となった戦車隊

福岡県 松尾 正一

私の旧姓は甲木かきといい旧柳川藩の武士であったといいますが、生まれた実家は山門郡瀬高町で農業をしておりました。私は大正七年三月十日長男として生まれました。家には弟二人、妹三人の弟妹がおりましたので、自動車の修理工場を経営していた久留米の叔父のところまで修業していました。

私は昭和十五年徴集でしたが、当時、既に支那事変の最中でしたし、学校も出ていませんでしたので、軍

隊に入り下士官になろうと思っていました。十八歳の時、現役入隊年齢の前に戦車隊に志願をしました。村から三人検査を受け、私も甲種合格となったのに私一人だけ不合格となり不審に思っていました。戦車隊を希望したのは、私はタクシーの免許を持っていたからなのですが、あるいは農家の長男であったから不合格となったのかと、後で思っていました。

正式の徴兵検査は昭和十五年十二月一日でしたが、今度は第二補充兵役になってしまい、現役兵での入営ではありません。しかし、十六年七月十六日、関特演の動員で臨時召集を受け、久留米の戦車第一連隊（後の西部第四十九部隊）へ入隊したのです。

一期の検閲までは陸軍の一般兵としての教育でしたが、その後の戦車の運転訓練では優秀な成績を取り、

賞状をもらい、いまでも家に保存してあります。十月二十四日、第十野戦補充隊の戦車隊が編成され、私も昭和十七年二月一日、一等兵となり一人前の兵隊となつたわけであります。

戦車の一個中隊は、重戦車四両、中戦車四両、軽戦車（装甲車）四両の十二両編成でしたので人員は九十人ぐらいでした。私は中戦車で中隊長の伝令として勤務していましたが、自動車免許は営業用自動車（タクシー）のほかに二つを持っていましたので、運転については自信もあり、また叔父の自動車修理工場で修業し技術を習得していましたから、他の者より重用されていたのは幸せでした。しかし、中隊長の伝令というのは大きな責任をもっているのです、その点では影で随分苦労したものです。

既に欧州では大戦中であり、日米、日仏、日蘭、日英の関係は険悪となり、支那事変はますます拡大し、中国に対する米英等の援助、援蒋ルート閉鎖と仏領印度支那（ベトナム、カンボジア）への派兵が、大東亜戦争勃発への導火線となり、昭和十六年十二月八日、

大東亜戦争開戦。我が部隊はいよいよ外地へ出兵、今になって思えば、大戦中の緊張した中にいたわけです。

昭和十七年三月四日、七〇〇〇トン級の船に戦車隊と弾列（第二中隊でトラックが多かった）は乗船し、門司出帆。三月十二日高雄寄港、三月十九日仏印サンジャックからサイゴンへ上陸したのですが、既に近海には潜水艦等が出没しているとの情報もあり、四六時中甲板に出て海上の警戒をしていました。仏印サイゴンでは約三カ月間、戦車隊の教育訓練はありましたが、私は中隊長の伝令をしていました。

【参考資料】

昭和十六年

五月七日

野村大使、ハル國務長官に中立条約提議

芳沢大使、蘭印側とのゴム・錫交易交渉決裂

五月十六日

英国、マレーからの日本及び円ブロックへのゴム

輸出禁止

六月十八日

日蘭石油交渉決裂

六月二十一日

米国、石油全製品の対日輸出を実質的に禁止

六月二十六日

陸軍大臣、仏印進駐のため第二十三・二十五軍司

令部等の臨時編成を令達

七月二日

大本営、関特演を発動、満州に七〇万の兵力を集

中

七月十六日

関特演第一〇二号動員下令

七月二十三日

日・仏間に南部仏印進駐の話合い成立

大本営、南部仏印進駐発令

七月二十四日

ルーズベルト大統領、野村大使に仏印中立化を提

案し、石油禁油をほめかす 在米日本資産の凍

結決定

七月二十五日

A(米) B(英) C(中) D(蘭) 包圍陣形成

政府、駐日英・米大使に日・仏共同防衛成立(南

部仏印進駐)を通告

七月二十七日

蘭印、日本資産凍結・対日輸出入制限・石油協定

の停止

七月二十八日

日本軍、南部仏印(西貢等)進駐

十一月六日

大本営、南方軍に南方要域の攻略準備を命令

十二月八日

開戦

米・英・蘭、対日宣戦布告 日・仏軍事協定

日・泰間に日本軍の泰国内通過承認協定成立

昭和十七年

二月十一日

南方二十五軍、シンガポール・ブキチマ高地等占

領

南方軍と南方部隊、ジャワ上陸日を二月二十六日と改定

三月十二日

ジャワ島の英豪軍八〇〇〇人降伏

三月十九日

ビルマ作戦開始

六月五日

ミッドウェー海戦

七月五日

泰緬連綴鉄道建設工事開始

七月十一日

サイゴンで泰・仏領印度支那国境画定の議定書及び非武装地帯に関する議定書署名

六月二十四日、サイゴン出発、二十八日シンガポール港に着きました。我々はシンガポール作戦参加の予定だったらしいのですが、シンガポールは二月十一日占領予定（ブキテマ高地は占拠）であったのが二月十一日に陥落しましたので当然参加はしなかったのです。次はジャワ島戦ですが、これも三月十二日陥落しまし

たので、七月四日ジャワ島のタンジョンプリオに到着したので、戦闘参加はありません。

サイゴンから昭南（シンガポール）までの航行中は、甲板に戦車を上げて、水平線目がけて実弾射撃をして初年兵の教育をしましたが、訓練の主なものには操縦と前方誘導でありました。戦友会で自衛隊の戦車に載せてもらいましたが、今はコンピューターでやっています。「戦車は歩兵戦闘の道を開くにあり」が戦車の本分でありますから輸送船上でも訓練を行っていたのです。七月六日、ジャワのタンジョンプリオに上陸しましたが、現在のボゴールには世界一の植物園がありました。このジャワでは我が中隊は「戦車の本分」に向かってほとんど毎日のように訓練をしていました。

しかしその間、内地とは気候も異なる暑さですし、虫も多く、 Dengue 熱という病気にかかり、毎日四〇度という体温で悩まされました。伊藤小隊長の当番をしていましたが、入院療養することになりました。入院中は、中隊は各歩兵隊へ戦車を持って配属になり、第一中隊は三分され、別れ別れになりました。

退院して中隊へ帰るにも私の行く所はなく、本部へ申告に行きましたら「部隊解散のため、原隊へ帰れ」と命令され、戦友とも上官とも別れ、昭和十七年十二月二十六日、ジャワ島のジャカルタを出発しシンガポールへ着き、兵站にいて原隊帰還の船を待ちました。十一月三十日だったと記憶しています。

しかし、内地までは単独行動なので、民間人と同様に船賃を払わねばならないという金がなく、そのため、酒保で安く買ったものを民間人に闇で売って、日本円で九〇円くらい作りました。十一月十五日、豪華客船（当時日本でも最大）「箱根丸」が入港し、それに乗って帰ることになったのですが、船賃の七〇円は、先程申しましたように酒保品を売った金から払うことができず、民間人と同じなので、金がなければ日本へ帰ることができないのですから心細いことこの上ありませんでした。

十二月二十二日、高雄港へ寄港、内地の宇品港へ着いたのが昭和十八年一月五日でした。しかし汽車賃がなく、やむなく携帯毛布を民間の人に買ってもらい汽

車賃を作り、一月五日、久留米の戦車隊が戦車第十八連隊になっていたので、帰隊の申告をしました。その時、旅費を精算してくれましたが、二七〇円にもなり驚きました。こんな大金をもらっていいのかと思ったからです。その上、外泊十日間の許可ももらって福岡の瀬高へ帰りました。家では連絡もなく帰ったので驚いて「お前は生きていたか」といわれました。

その後、第十八連隊に一年二月おりましたが、階級は兵隊でも戦地帰りの古兵、古兵といわれ初年兵の教育助手をしていました。戦車隊では初年兵を叩いたりはしませんでした。一般兵科とは違って、戦車は飛行機と同じで技術屋であり、戦闘の時は死ぬ率が高いので特別でした。私が入隊したときは、自動車の免許証を持っているのは中隊で二人だけでしたから、体罰より技術を覚えさせることの方が先決で、教育の成果を上げなければなりませんでした。召集解除は昭和十九年三月九日でした。

大東亜戦争初期の進攻作戦の時の蘭印ジャワは比較的よかったです。私が帰ってから、特に終戦前後

は和蘭軍が上陸したり、独立戦争があったりで苦勞があり、終戦二年後によくやく復員した者もおりますし、終戦後亡くなった戦友も随分多いのです。戦友会で戦友からその状況は聞いています。しかし、「ジャワの極楽、地獄のビルマ、生きて帰らぬニューギニア」と、ざれ歌を歌う人がおりますが、戦場は皆同じ苦勞はありますが、軍隊は運隊というごとく、たしかに、戦没戦傷病死者の比率はジャワなど蘭印諸島は低かったかも知れませんが、我々の仲間も随分死んでいます。

私は、気が強く、小学校の時でも、「お前は学校へこなくてもよい」などと先生に言われるほどの利かん気の男でした。また文句をいう者には腕力でも押さええていました。軍隊では、中隊長や小隊長の伝令となり、上官が良い人であって畑中隊長（後に中佐）からも可愛がってもらえ幸いでした。戦車に乗れば隊長も操縦士も砲手も通信士も「一蓮托生」で生死を共にしなければなりません。戦車はある意味で盲目、一人一人が、それぞれの任務を全うしなければ戦車の機能は果たせないからです。

私は前にも申したとおり、上級の学校を出ていなかったので、帰国してから、前職の自動車修理技術を生かし、自動車の塗装、焼き付けをしました。以前この技能士の試験が東京であり、九州から二十七人受験し、合格者は私一人でしたので、三十七歳の時、一級技能士として大臣表彰を受け、国の賠償のため泰国で七年間技術指導しました。佐賀トヨタに勤め、最終は総務課長で退職しました。軍隊時代もトヨタ時代でも技術は良くても学科では苦勞しました。子供のころから負けん気で通してきましたが、軍隊の時より、帰ってからの方が国のため、社会のために尽くすことができたと思っています。

定年退職後、故郷、瀬高で生活していましたが、妻は脳血栓で倒れたので十一年間看病し四年前亡くなりました。家内に対しては近所の人も感心してくれました。現在、洗濯物でも軍隊時代と変わることもなく整理整頓しきちんとたたんでいます。これなども二年八カ月間軍隊で教育を受けたお陰で、これが戦後役にたっているわけでありませう。

現在は戦車の性能も五十年前とは比較にならぬほどよくなっていますが、この性能を生かす技術も、戦闘時の操作も皆従事する隊員の精神と技術能力によると思われます。結局、基礎となる教育であることは、今も昔も変わらないと思います。私の七十余年の人生の中で、その骨格をなしたものの一つは、約三年におよぶ軍隊生活、軍隊教育、戦場での体験であったと思いますし、毎年の戦友会でも会える先輩や戦友との語り合いが、我が人生の楽しみでもあります。

歩兵第八十二連隊（討部隊）

仏印ランソン要塞攻撃

富山県 伊東 八郎

私は大正十一年二月四日、現在の黒部市古郷堂という所で農林業を営む家の二男として生まれ、昭和十七年徴集兵として検査を受け甲種合格でありました。当時、富山連隊と言われた歩兵第三十五連隊は第九師団

の隷下で満州駐屯でした。第二十一師団の第八十二連隊は支那から北部仏領印度支那にあり、また歩兵第六十九連隊は第五十二師団隷下として南方へ転出するのでした。

私が入営したのは元歩兵第三十五連隊の兵舎で、部隊名は歩兵第六十九連隊第一機関銃中隊でありました。同年兵はたしか三〇〇人くらいだったと記憶しています。しかし、未教育のまま内地出発で、教育は現地ですということでした。

十八日、仏印サイゴンへ上陸。北陸と違った暖かい所だと感じながら金邊という所へ着き、直ちに出発。二十日泰仏印国境を通過し、翌二十一日タイ国首都バンコク着、六月二十五日、我々の転属先である第二十一師団歩兵第八十二連隊の駐屯する、仏印サイゴン港に上陸し、同連隊の第二機関銃隊に編入されました。そのまま、我々は一カ月間、幹部候補生と一緒に教育を受けたのであります。

連隊は第一大隊がサイゴン、第二大隊はタイ、第三大隊はブノンペンでありました。私の第二機関銃隊は